

平成21年夏秋号

四寺廻廊

国宝瑞巖寺 平成の大修理 国宝瑞巖寺本堂ほか七棟建造物保存修理事業

瑞巖寺の始まりは比叡山延暦寺第三代座主慈覚大師円仁により天長五年（八二八）に天台宗延福寺として開創され、その後、鎌倉時代に臨済宗に改宗され円福寺となりましたが、仙台藩祖伊達政宗公によって慶長十四年（一六〇九）に臨済宗妙心寺派の寺院として造営されました。正式名称は「松島青龍山瑞巖円福禅寺」。伊達政宗公により建てられた瑞巖寺ですが四〇〇年の歳月の流れによる地盤の不同沈下等により建物に歪みが生じており、近い将来に來ると予想されている大規模な地震も考慮し、足かけ十年にも及ぶ大規模な保存修理事業をすることとなりました。

事業は平成二十年の十一月より平成三十年三月頃までの計画です。それに伴い国宝の本堂への拝観は平成二十一年の九月一日より平成二十八年頃まで出来なくなる予定ですので、その前に一度拝観されてはいかがでしょうか。

そして、本堂拝観ができなくなる九月一日からは今まで非公開であった国宝庫裡の内部の特別公開。そして政宗公正室愛姫（陽徳院）の靈廟「寶華殿」も特別公開致します。

この「寶華殿」は、万治三年（一六六〇）孫の綱宗によって造営され、昭和二十八年三月に宮城県指定有形文化財として指定されています。

宝形造・銅板葺、九尺（二、七二m）四方の周囲に勾欄（手すり）つきの回廊を廻らし、正面に向拝と木階を備えており、外面全てを黒漆で塗られ、棧唐戸や暮股は金や極彩色に彩られ、失われていた飾

金具も復元荘厳されました。内部は三方板壁で金箔を貼り、天井等には極彩色の花が描かれ、須弥壇に念持仏と政宗・愛姫夫妻の位牌が安置されており、平成十八年から三年をかけ創建当初の豪華絢爛な姿に復元されました。

この「寶華殿」は瑞巖寺専門道場（修行道場）の裏手にあり、今まで一般に公開したことはありません。保存修理事業が終わるとまた非公開にする予定にしておりますので、この修理事業の期間に是非お越し下さい。



9月1日より特別拝観される「寶華殿」

《もくじ》
 四寺ご任職のお話……………
 慈覚大師円仁様誕生祭並びに世界の平和祈願法要開催
 北上川……………
 みちのくの匠 気仙大工……………
 山川草木「花の寺・毛越寺」……………
 お知らせ……………

四寺ご住職のお話

平和と幸福の廻廊をめぐる



中尊寺 貫首
山田俊和

奥州平泉の仏都建設は、今から約九〇〇年前、藤原清衡公の中尊寺建立に始まります。前九年・後三年の合戦を経て、陸奥押領使となった清衡公は、戦争にあげられる奥州に平和をもたらすために、仏教に帰依し、武器を捨て、戦争を放棄し、仏像を刻み、堂塔を建立し、経を読み、写経をし、その文化的方法によって中尊寺を創建し仏都平泉建設を進めたのです。

清衡公が学びとられた仏教の根本精神は、「一切衆生悉有仏性」「山川草木悉皆成仏」という絶対平等と悉皆成仏です。この言葉の大意は、「この世の中に生まれてくる全ての命あるものは、仏に成るといふ尊い性質がそなわっており、人間ばかりでなく、動物も鳥も魚介も、木や花など植物も、命あるものはいつか必ず仏に成る」ということです。

中尊寺は長治二年（一一〇五）に清衡公によって造営に着手され、天治三年（一一二六）三月二十四日に完成し落慶供養が営われました。その折清衡公は「中尊寺建立供養願文」を読み上げました。そこに、清衡公の平和で幸福に満ちた奥州を築くための強い誓願と決意を、そして仏心をもることができま。

願文には、中尊寺創建に当り大別すると次の三点が述べられています。

- 一、全ての人の苦しみを取り除き、全ての人に楽しみを与えたい。
- 二、前九年・後三年の合戦等で、故なくして命を落とした人の靈魂を、敵・味方の区別なく、みな浄土に導きたい。
- 三、仏教を信じ、仏の加護を得るのであるから奥州人も都人も何も変らず平等である。

これらの主張は仏教の絶対平等と悉皆成仏の教えであり、清衡公は抜苦与楽・普皆平等と言われています。特に、敵・味方の区別なく合戦によって死んだ者の靈魂を浄土に導きたいと述べられたことに、深い感動をおぼえます。世界中に、この清衡公のように敵も味方もなく全ての人の幸せを願った人があるのでしょうか。奥州が世界に発信し続けなければならぬ平和の求め方、あり方がここにあります。

さて、今日の私達の関心事は、地球温暖化、エネルギー、食料、民族、宗教、人権等々にあります。これらはどれも人類共通の問題であり、一國で解決できるものではありません。近年、物は豊

かになり便利な社会になったといわれます。しかし、社会は多様化、複雑化し、世界の統一された価値観も見出せず大混乱の中にあります。世界中が、人類の平和と幸福のために努力をしています。が、良い方策が見つかっていません。

ひととき、静かに深く考えなくてはなりません。私達は誰もが自然の恵み（大地・太陽・水・空気等）に恵まれて生きています。また私達の命は、人間以外の動植物の命によって保たれ、また多くの他人の協力があつて保たれています。誰もが衣・食・住の全てにわたって、他のものとの深い関係の中で生かされ生きています。

そして私達のかげがえのない命は、先祖・父母を身近の縁として、神仏のはからいでこの世に誕生します。尊い命をいただいて、生かされ、生きています。

「人中尊」という言葉が仏教にあります。全ての人は仏に成るといふ尊い命をもって生れる。その尊さを自分自身に、他人に認め、尊重しあい宥しあうことが大切です。そのような仏心が今の世に必要なのだと思います。人中尊を心に、家族・友人・そして多くの人々と手を携え、自分の居る場所を率先して理想郷（浄土）にする努力を絶え間なく続けることです。

四寺廻廊を巡拝されながら、ご利益をいただき、尊い命・平和や幸福について考えてみて下さい。ほんものの平和と幸福は、一人ひとりの努力と、世界中の人の協力がなければ得られません。その根本にあるべきことを見出さなければなりません。



【平成二十年本堂に遷座された丈六阿弥陀如来】

四月十四日、山寺立石寺に於いて、第二回慈覚大師円仁様誕生祭並びに世界平和祈願法要が、日本・中国・韓国の三国の僧侶により盛大に催されました。日本からは、山寺立石寺貫主清原浄田師と立石寺山内住職が、中国からは、山東省仏教协会会长で青島の湛山寺方丈（住職）の明哲師外、赤山法華院の僧侶など七人の僧侶が、又、韓国からは、慈覚大師が在唐中に全面的に援助を受けた、新羅の貿易王



チヤンボゴ將軍の出身地、全羅南道の莞島の新興寺住職の法白師など、日・中・韓三国の僧侶が参加しました。

当日は、朝六時から立石寺開山堂にて慈覚大師の供養法要が行なわれ、八時からは、中国・韓国の僧侶が、山寺の街中を行列して立石寺の根本中堂に登り、日・中・韓三国の僧侶がいつしょに慈覚大師の慶讃法要を行いました。その後、全員が鐘楼と「平和の鐘」前の式場まで行道し、

誕生祭と平和祈願の法要を厳修しました。その後、九時に日・中・韓三国の代表の僧侶が鐘楼に登り、それぞれ梵鐘を打ちました。又、参列者全員が、大師の遺徳をしのび、平和への祈りをこめて「平和の鐘」を打ちました。さらに、同時刻に、日本

国内の慈覚大師ゆかりの寺院と、中国・韓国の大師ゆかりの寺院でも、同じ様に梵鐘が打たれ、平和への願いを新たにしました。

この催しについては、前山形県会議員の大内孝一氏が発願し、山寺地区文化観光推進協議会が主催しました。大内氏は県会議員引退後、山形の歴史を研究する中で、慈覚大師の御生涯の事蹟を知り、大変感激し、自身で日本国内はもとより、中国・韓国の大師ゆかりの地を訪れ、慈覚大師の御生涯に想いをほせながら、その偉大な御精神を現代によみがえらせたい、との思いを強くしました。そこで、大師終焉の地とされる、山寺の立石寺を中心に、全国各地のゆかりの寺院を始め、世界中の大師ゆかりの寺院で、同じ日の同じ時刻に鐘を打ち、大師の遺徳を偲ぶとともに、世界平和を祈願する事を発願し、昨年四月十四日に、第一回の、慈覚大師円仁様誕生祭並びに世界平和祈願法要を行なったものです。

今回の祈願祭には、地元山寺地区だけではなく、広く山形県内各地からも多くの人が参加しました。中国からも、山東省の宗教局や観光局の関係者をはじめ、多くの信者の方々が、韓国からは、「海上王張保皋（チヤンボゴ）記念事業会」の関係者で歴史学者の方々等、多くの人達が参加しました。

この様に、今回の法要に参加した人には、千二百年前に、慈覚大師が生命をかけた求法の旅にかけた真摯な思いや、世界の平和への思いをあらたにした、有意義な催しでした。今後は、中国や韓国の国内でも、この様な催しを積極的に行ない、互いの関係を強化して行く事も誓い合いました。

北上川



西行法師が感嘆した桜の束稲山、松尾芭蕉が涼した夏草の平原。その風景には北上川があった。北上川は、岩手県岩手郡若手町の源流「弓張の泉」から宮城県石巻市まで流れる一級河川。流路延長二四九km、流域面積一万五千km²は、東北最大、全国で四番目の河川である。

化石燃料による動力がない時代、人馬による陸運には限界があり水運が果たした役割は大きい。北上川は勾配の緩やかな北上平野をゆっくりと流れることも水運には好都合であった。石巻からはさらに南北へ海運が可能である。

奥州藤原氏は内陸の平泉に居を構えながら、京都との物流・情報収集に北上川を利用した。北上川が人々に与えたのは恩恵だけではない。度々おきる河川の氾濫は人々を悩ませた。

仙台藩伊達政宗が始めた北上川の治水工事は、一六〇五年に着手の「相模土手」に始まり、それにより栗原郡・登米郡の新田開発がすすんだ。江戸時代を通じて進められた治水・利水事業で、仙台藩の表高六十二万石に対して実高は百万石にまでなったと言われている。

明治には現在の八幡平市に硫黄鉱山が発見され、一九七二年に廃鉱となるまで「雲の上の都市」と言われるほどの鉱山街が出現した。鉱毒水が北上川にまで流れ込むという問題が残り、現在でもその浄化処理は続いている。

文明と河川との関係は世界共通である。河川の恩恵を受け続けられるかどうかは、我々人間次第なのかもしれない。

みちのくの匠 気仙大工

気仙大工は岩手県陸前高田市小友町が発祥の地といわれ、気仙地方の大工集団の呼称である。気仙地方とは岩手県の住田町、大船渡市、陸前高田市の一帯を示すが、後年、岩手県南部、特に東西の磐井郡にその技術が継承され、自らも気仙大工と称したといわれる。(宮城県の気仙沼市は歴史的に本吉郡に属し、気仙地方には含まれない)

いつの時代から気仙大工と呼称されるようになったか定かではないが、文献に初見したのは、元治元年(一八六四)岩手県藤沢町金野家に伝わる『家作諸入料覚』で、「気仙大工 三作」と記述されており、また明治三十四年、宮城県大郷町葺石家棟札には、「気仙大工 金野富吉、藤倉豊吉」と記載されている。このことから江戸後期幕末にはすでに気仙地方以外でも活躍していたことが窺い知れる。

気仙大工の特徴は、民家や神社仏閣の家屋建築のほかに、建具や緻密な指物までこなせる技量にあり、トータルな仕事が出来なければ一人前として評価されず、それぞれが競い合い、独自性を重んじる気仙大工の気風が確立されていたと思われる。

そして、そのような技術力の高さが全国に知れわたり、例えば、歌舞伎座施工や大阪城復元などの参加につながっていた。地元の仕事としては岩手全域はもとより、宮城県北では石巻市金華山神社山門、本吉町峰仙寺、気仙沼市興福寺、栗原市有壁本陣などに気仙大工の作風を垣間見ることができる。

(参考文献 岩手県建築士会「建築・岩手紀行」ほか)



岩手県陸前高田市普門寺
普門寺は京都建仁寺の栄西法師の子である記外和尚が創建したと伝えられ、再興以来三八〇余年の古刹。



【花の寺・毛越寺】

毛越寺は「花の寺」。春は桜が咲き誇り、新緑の季節・五月第四日曜日には「曲水の宴」が開催されます。六月二十日〜七月十日は、「あやめまつり」が開催され、花菖蒲が見頃となります。夏の終わり頃になると境内一円に数百株も植えられている萩が咲き出し、秋めいてくるにつれ彩りを加えていきます。萩が終わると、十月も半ばを過ぎると紅葉が始まり、秋の深まりと共に毛越寺庭園はますます赤く彩られていきます。冬になり、庭園一円に雪が積もると、まさに水墨画の世界のようになります。

毛越寺庭園は「浄土庭園」、つまり清浄なる仏の国土をこの世に現した庭園ですが、現代の喧騒から隔絶された空間がそこにはあり、参拝者の心を癒し、和ませてください。

その昔平泉を訪れた源頼朝は、毛越寺を見て「吾が朝無双の荘厳なり」と言ったと『吾妻鏡』には書かれています。その後鎌倉、安土桃山時代、三度にわたる火災によって建物は全て失われました。しかし、多くの先人のご尽力により、庭園は平安時代当時のままの姿で残り、今では平安時代にふさわしい草木を植栽するなどして、四季折々に応じた風情を楽しんでいただくことができます。



平成の大修理が始まる瑞巖寺本堂

編集後記

ETC 高速道路休日特別割引が八月のお盆の前の木曜金曜にも適用される。ETCカードを持っていないと車での旅行は割高になってしまう。平泉最寄りの平泉前沢ICから山寺最寄りの山形北IC間の通常料金は三九五〇円。休日割引千円。山形北ICから松島海岸ICの料金は二九五〇円休日割引を使うと一七五〇円。何で?と調べてみると仙台南部道路が宮城県道路公社の管理で割引が適用されない。ちょっと損した気分。只にしては言わないが、せめて一日何回乗っても降りても千円にならないものか。
(志)

お知らせ

- 8月5日～7日 山形花笠まつり [山形市]
- 8月6日～10日 仙台七夕 [仙台市]
- 8月6日 警司祭・夜行念仏 [立石寺]
- 8月14日 中尊寺新能 [中尊寺]
- 8月16日 大文字まつり [平泉町]
- 8月16日 大施餓鬼会 [瑞巖寺]
- 8月17日 松島灯籠流し花火大会 [松島町]
- 9月6日 日本一の芋煮会フェスティバル [山形市]
- 9月8日 三代開山毎歳忌 [瑞巖寺]
- 9月15日～30日 萩まつり [毛越寺]